第 36 回　魔弾の射手になりたい？

ＩＴ生

どうも、科学者というものは、必ず標的を射貫く「魔弾」の魅力にとりつかれるらしい。このところ、あいついで、開発されている抗がん剤もそのきらいがある。

７月の豪雨の教訓から、政府は、さらなる精緻な「ハザードマップ」を開発し、住民に「くまなく周知する」ことにやっきになっている。ハザードマップというのは、一定の「災害が起こるシナリオ」にもとづき、ある自治体の被害想定を図で示す。どこの自治体も「市報」などにのせて、または最近のことだから、自治体のウエブサイトでも、公開されている。

これ以上、周知のしようがあるのかと思うが、政府は、災害のたびに教訓めいたことを言わねばならないという強迫観念にとらわれるから、そうは考えないらしい。

住民が手書きした避難マップこそ役に立つ

ハザードマップの内容もさらに精緻化するというのだが、被害想定は、地形上、細かくいえば自治会ごとに異なる。津波の被害の様相も、浦ごとに異なるといわれる。もし、そ

んなものが必要なら、現在のハザードマップに自治会の自主防災会なりに過去の言い伝えや、被災地にある碑や歴史をひもとかせて記入（バージョンアップ）させればいい話だ。実際、多くの自治会ではそうしている。そういう作業をへてこそ、住民はハザードマップや警報のたぐいの災害情報を有効に使えるのだが、なぜ、それに気づかないのだろうと思う。

自治会の加入率が減少しているというが、自治会が存在しない場所はないはずで、現存する人数で作業をし、配付すればいい話だ。もっとも、ハザードマップに情報の記入を進めている自治会でも、いきつく先は「自然は人間のスケールで測れない」と気づくだけなのだが、その「絶望」の先にあるのは、それなら、絶対安全地帯を決めておいて、安全に早めに逃げてしまおうという「賢明な選択」なのだ。

科学を追究することは、人間の限界を知ることなのだと、寺田寅彦師は諭している。裏を返せば、いつまでも賢くなれないから、追究心が生まれるというべきなのか？　オペラ「魔弾の射手」の主人公は最後、隠者に連れられ、悟りを開く旅にでる。果たして、無事、フィアンセのもとに還ってこれるのだろうか？と心配せざるを得ないこのところである。

（平成 30 年 7 月）